

(Lonely Night Gathering)

さみしい夜の句会報 第268号 (2026.4.5-2026.4.12)

参加者: クイスケ、七澤銀河、空野つみき、しまねこくん、カオルル、山田真

佐明、汐田大輝、何となく短歌、鈴木正巳、佐井杜有、

Nichttrachender、月階柚、あづみのマルコ、蔭一郎、田中美鶴、岡

村知昭、東ころ、不思議な話のアイ、雷(らい)、奇妙丸、雨声、

なまむい、安藤蜜豆、三明十種、桑原 雑、詠んでみた水草、しろうと

も、also、宮坂愛哲、季川詩音、水の眠り、ふくろうたかこ、石川聡

まじけい、松本清展、詠んでみた水草、よもやまさか、月波与生

(二八名)

◆川柳・俳句

国境を越えないように無花果を クイスケ

早寝とはシリコン製の型である クイスケ

湯豆腐の瞬間移動やってみた 汐田大輝

ご夫人の胸から下がアドリア海 汐田大輝

相方と呼吸を合わせ犬を抱く 山田真佐明

朧夜の陰毛ゆらりゆらりかな カオルル

水替えて厨の蛭眠らむか カオルル

住民の苦情を鳩にする係 しまねこくん

タイトルで買った書籍が鳩と化す しまねこくん

還暦になれば挿木で蘇生する しまねこくん

コンドルも洗濯物も春嵐 しまねこくん

ジェンダーが分かれる前のむつごろう しまねこくん

やどかりの遺跡であつた貝の山 しまねこくん

有害な凶書を浮かべて春の川 しまねこくん

穴を出て穴へ戻つてしまふ熊 しまねこくん

肉眼で見へる細菌風光る　しまねこくん
人形の前後左右に汽車を置く　空野つみき
退屈をモダンローズの莖に貼る　空野つみき
秒針の狂った兄と飲むホッピー　佐井杜有
緩やかに巻き取られて行く四月の音　七澤銀河
逃亡犯と共に一夜を過ぐす猫　七澤銀河
朝焼けの誤配に護符の縄梯子　蔭一郎
リュウグウノツカイしたたる滑り台　蔭一郎
手招いた椅子におもちゃの鬼子母神　蔭一郎
野を焼きて胴だけ残るこけしかな　蔭一郎
砂山に棒いっぽんの市街戦　蔭一郎
夜半(よわ)荒れてさくらを見たくないころ　リコシエ
悲しみと濡れてマダムは安座する　山田真佐明
慣れてきた耳で桜を見てもみる　雷
警備員も長靴を履く直売所　雷

*

踊る阿呆の赤い靴　Nichttraucherchen
読経で踊る蛙や花手水　田中美蟲角
三叉路の河馬をどうするまづ拭う岡村知昭
両想いなのでシャンパン入りのチョコ　東こころ
スサノオはチョコミントの匂いにする　アイン
寒暖や巡る月夜の濃く淡く　奇妙丸
後先を考えもせず春嵐　安藤　蜜豆
図りかね　影を踏む猫　身を縛り　桑原維
酔う更け食らわばいたい焼き　詠んでみた水草
メートルをあげるおじさん花筏　宮坂愛哲
酔ってますよという誰もいないのに　しろとも
脳みその吾は花年様華の頃　akao
木の芽雨自由を手にし独立す　季川詩音
イラン要らんとドナルド氏　ふくろうたかこ
遅いもくれん早いもくれんと終はりにけり　石川聡

独学で川柳詠むや春の雨 まどけい

無罪放免くれずも一度来いてさ肺の塊正体不明 松本清展

*

カブトムシ雨の予報を信じない 月波与生

◆ 短歌

父ちゃんもフランス語できたらいいのに フランス語のスタンプ送るよ 雨声

バス停のキリンがいなくなっていて春になったと納得をする 月階柚

幸せを比べてみても意味ないとわかっていても揺れる天秤 なさわご

*

転勤を祝ってくれてありがとう朗報として伝わったのね 何となく短歌

勤めとは鍵を磨くに似てあたり開けぬ扉にあなたを待ちて あづみのマルコ

湯煎して型いれをするチョコレートふわふわ言葉で育てた かった 水の眠り

◆ 詩・短文

ぼくという人間がいたこと

それを忘れたくて

青い星を造ってみました

きみはここで眠っているだけでいい

ぼくだけが疲れ果てていればいい

ぼくはここで始まりを見届けたい

きみの頬を撫でる

ぼくの頬を抓る

何周もした跡がついている (空野つみき)

◆作品評から

読んでない本のレビューを書く四月 しまねこくん

〜新しい生活、虚栄心、あるいは「そうあるべき自分」を演じなければならぬ焦燥感。「四月」という季節設定が巧み。(月波与生)

縫い代をすすむ仔牛が折り返す 蔭一郎

〜布の上を仔牛が歩いているのか、裁縫の「まつり縫い」のような動きを仔牛に例えたのか。単調なリズムの中に、牧歌的な風景が入り込んでくる感覚がいい。(月波与生)

シルクハットから足音がぼろぼろ 空野つみき

〜シルクハットから、ハトやウサギではなく「足音」が出てくる。しかもそれが「ぼろぼろ」とこぼれ落ちる。聴覚と視覚の混濁。(月波与生)

発火する犬の毛並みのモース硬度 クイスケ

〜「犬の毛並み」という柔らかいものに対して、鋏物の硬さを示す「モース硬度」という冷徹な尺度を持ち出す対比。イメージの跳躍。「発火する」という動詞が火花のような鋭さを鮮やかに描き出している。(月波与生)

茹ですぎのパスタと揉める親知らず 七澤銀河

〜日常の「不快」をユーモアに転換した句。本来なら柔らかいパスタは親知らずに優しいはずなのに、あえて

「揉める」と表現した点に、噛み合わせの悪さや生活の苛
立ちが凝縮されている。(月波与生)

肉眼で見へる細菌風光る しまねこくん

しまねこ君けつのまわりの風光る (よもやまさか)

有害な凶書を浮かべて春の川 しまねこくん

これはもうすべて水に流してしまおうという結論でし
ようか。見たことさえも忘れてしまいたい。そんな微かな
希望かもしれません。(季川詩音)